広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	広島県宮島町方言の社会言語学的研究 : 動詞否定接尾辞〜ンと〜ナイについて
Author(s)	高永, 茂
Citation	ニダバ , 16 : 27 - 35
Issue Date	1987-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00047182
Right	
Relation	

論　文

広島県宮島町方言の社会言語学的研究

―― 動詞否定接尾辞～ンと～ナイについて ――(注１)

高　永　　茂

はじめに

小論では、1985年４月から６月にかけて広島県佐伯郡宮島町（注２）で実施した調査に基づいて、動詞否定接尾辞（注３）～ンと～ナイとの使用状況の違いを、社会言語学的な観点から考察する。

動詞否定接尾辞～ンは広島方言に属する形態素であり、動詞否定接尾辞～ナイは標準語に属する形態素である。宮島町という言語社会には、この～ンと～ナイの二形態素が共存している。両者はともに、動詞の否定形の形成という言語的機能を担っており、相互に交替することができる。しかしながら、今回の調査で得られた資料を分析した結果、～ンと～ナイには、本来の言語的機能のほかに、敬意に関わる新たな意味付けがなされており、必ずしも自由に交替しているわけではないことが分かった。さらに、個々の話者の間に見られる、～ンと～ナイとの使用状況の違いは、性別、年齢、地域社会志向といった社会的要因と関連があることが分かった。なお、今回の調査では、言語事象に関する調査とともに、話者の社会意識と社会活動についてのアンケートも併せて実施した。

§１．話者の構成と質問文の内容

まず、話者の性別と年齢の構成は〈表１〉のようになっている。話者は全部で60人（注４）であるが、一部の話者は回答に不備があったため、第 3.2節以下の分析では話者の人数が57人となっている。また、話者には広島県以外の出身者が10人含まれている。しかし、出身地の違いは、～ンと～ナイとの使用状況の相違を説明する要因とは認められなかった。

〈表１〉話者の性別・年齢別構成

	男性	女性	計
20歳代	4	4	8
30歳代	4	7	11
40歳代	5	11	16
50歳代	5	6	11
60歳代以上	5	9	14
計	23	37	60

次に、動詞否定接尾辞～ンと～ナイとの使用状況の違いを分析するための資料について述べる。資料は、以下の方法で収集した。

特定の場面を設定した質問文を二個用意し、それぞれの質問文について、四通りの相手に話しかけるとき、どのように言うかを尋ねた。

まず、この質問文は、

(質問文1)

道が工事中で通ることができません。「この道は通ることができない」と教えてあげるとき、あなたなら、どう言いますか。

(質問文2)

ワールドカップマラソンを見物に行ったかどうか尋ねられました。その人に「見に行かなかった」と答えるとき、あなたなら、どう言いますか。

の二つである。

次に、発話相手としては、

(A) 家族の中で年下の人に言うとき、どう言いますか。

(B) 親しい友だちに言うとき、どう言いますか。

(C) 近所の年上の男性に言うとき、どう言いますか。

(D) 宮島中学校の校長先生に言うとき、どう言いますか。

の四通りの場合を設定した。

従って、質問文1と質問文2とに対する回答は、それぞれ四個ずつ得られた。この回答を動詞否定接尾辞〜ンと〜ナイとの使用状況の相違を分析するための資料とする。分析の方法は、上記(A)から(D)までの四通りの発話相手に対して、〜ンを使用しているか、あるいは〜ナイを使用しているかを観察し、両者の出現パターンの違いを比較する。

ところで、(A)から(D)までの発話相手は、親しい間柄の相手から疎遠な相手へと配置したつもりである。この作成意図が実現されていることは、敬意を表す接尾辞〜デス・〜マスの出現状況から分かる。

〈表2〉は、(A)から(D)までの発話相手について、敬語〜デス・〜マスが使用されている割合を示したものである。

〈表2〉〜デス・〜マスの使用者数

	(A)	(B)	(C)	(D)
質問文1	0/60	3/60	41/60	55/60
質問文2	0/60	0/60	32/60	51/60

(注) 分母の60は話者の総数

〈表2〉において(A)と(B)の発話相手には、ほとんど〜デス・〜マスが使用されていない。しかし、(C)から(D)に向かうにつれて、使用者数が多くなっている。従って、(A)から(D)の配置は作成意図通りに、話者に認識されていると言える。

§2. 動詞否定接尾辞の副次的機能

宮島町の地域語に存在する動詞否定接尾辞〜ンは、標準語の動詞否定接尾辞〜ナイに対応している。両者の言語的機能と分布とは酷似しており、相互に交替することができる。話者が質問文1に回答した例を示そう。

(A) 家族の年下の者に対して

コージ　ショルケー　トーレン　ド。

（B）親しい友だちに対して

コージ　ショルケー　トーレン　ド。

（C）近所の年上の男性に対して

イマ　コージチューデ　トーレナイラシーデス　ヨ。

（D）宮島中学校の校長先生に対して

イマ　コージチューデ　トーレナイソーデス。

この話者の場合、（A）と（B）の発話相手には～ンを、（C）と（D）の発話相手には～ナイを使用している。このように、～ンと～ナイとは、動詞の否定形を形成するという言語環境で交代し得る。しかしながら、ここで注目されるのは、～ンと～ナイとが発話相手によって使い分けられていると考えられる点である。

〈表3〉は、～ンと～ナイとの出現状況を（A）から（D）までの発話相手ごとに整理したものである。ただし、集計するに当たっては、次のことが問題となったので、一部の数値に修正を加えている。

この問題は、トーレマセンあるいはミマセンに現れる動詞否定接尾辞～ンの認定に関するものである。標準語においては、動詞の否定形を形成するとき、～ナイを使用する。しかし、（～シ）マセンの～ンは、動詞否定接尾辞～ンが標準語内で使用される特別な例だと考えられる。つまり、マセンに出現している～ンは、標準語に本来備わっている要素であり、～ナイとは相補分布の関係にある。従って、この～ンは～ナイの異形態だと考えられる。〈表3〉では、（～シ）マセンの～ンを、～ナイの使用回数に含めて計算した。

また、質問文2の回答では、「見に行かなかった」という内容の回答を要求しているが、この場合、回答は過去時制となる。そのため、動詞否定接尾辞～ナンダが使用されることがあった。〈表3〉では、～ナンダを～ンの使用回数に含めて計算した。

〈表3〉で、動詞否定接尾辞～ンは（A）から（D）に向かうにしたがって使用者数が減少している。逆に、動詞否定接尾辞～ナイは、（A）から（D）に向かうにつれて、使用者数が増加している。この傾向は質問文1と質問文2との両方に見られる。

〈表3〉動詞否定接尾辞の使用者数

	質問文1		質問文2	
	～ン	～ナイ	～ン	～ナイ
(A)	42/60	10/60	52/60	7/60
(B)	37/60	13/60	41/60	14/60
(C)	17/60	34/60	27/60	30/60
(D)	7/60	46/60	13/60	42/60

(注) ～ンと～ナイの欄の合計が60になっていないのは、回答の中で～ンも～ナイも使用していない話者がいたためである。

ところで、～ンと～ナイとの言語的機能は、動詞の否定形を形成することである。そして、宮島町の話者がこの二つの形態素の機能を否定形の形成のみに限定して使用しているのならば〈表3〉中の～ンと～ナイの使用者数はもっと不規則になっていても良いはずである。しかし実際には、～ンは（A）から（D）の方向に減少し、～ナイは（A）から（D）の方向に増加

するという一定の傾向を見せている。この事実は、～ンと～ナイとに動詞の否定形形成という言語的機能のほかに別な意味付けがなされていることを窺わせる。そこで、この新たな意味付けについて考えてみよう。

（A）から（D）の発話相手は、親密から疎遠の方向に並んでいる。この配列にしたがって、～ンは使用者数が減少し、～ナイは使用者数が増加している。このことから、動詞否定接尾辞～ンと～ナイには、敬意の表出に関わる、新たな意味付けがなされていると考えられる。この意味付けは動詞否定接尾辞本来のものではなく、副次的機能とでも呼ぶべきものである。～ンと～ナイとに対する副次的機能の違いは、次のように記述できる。

(1)～ンは、親密な関係にある相手に使用し敬意は低い。

(2)～ナイは、高い敬意を表すときに使用する。

勿論、発話全体の中で、～ナイだけが敬意表出の役割を担っているわけではない。～デス・～マス、～レル・～ラレルを初めとする、一般に敬語と呼ばれている語が、敬意表出の中心となっている。宮島町の地域語内で動詞否定接尾辞に付与されている副次的機能は、広島方言在来の～ンと標準語に属する～ナイとの対立から生まれた産物だと考えられるのである。

§3.1　～ンから～ナイへの転換点

前節では、動詞否定接尾辞に付与された副次的機能について論じたが、宮島町という言語社会には、この副次的機能を強く意識している話者とさほど意識していない話者とが存在するようである。本節では、話者間に見られる個人差とそれに関連する社会的要因について述べる。

動詞否定接尾辞～ンが（A）から（D）の方向に減少し、～ナイが（A）から（D）の方向に増加することは前節で指摘した。～ンと～ナイとが示すこの傾向から、四通りの発話相手のある時点で、～ンから～ナイへの転換が行われていることが予想される。以下、この～ンから～ナイへの転換点に注目して分析を進める。

転換点の表示方法は、動詞否定接尾辞～ンが使用された発話相手までを数字で表すこととする。例として、質問文１に対する話者の回答を示そう。

（A）家族の年下の者に対して

コノ　ミチワ　トーッチャ　イケン　ヨ。

（B）親しい友だちに対して

ナンカ　コージ　ヤッテルカラ　ココ　トーラナイ　ホーガ　イーミタイダ　ヨ。

（C）近所の年上の男性に対して

コノ　ミチワ　トーラレナイ　ホーガ　イーデス　ヨ。

（D）宮島中学校の校長先生に対して

コノ　ミチワ　オトーリニナラナイ　ホーガ　ヨロシーデス　ヨ。

この話者は、「家族の年下の者」にのみ～ンを使用しており、「親しい友だち」、「近所の年上の男性」、「宮島中学校の校長先生」には、～ナイを使用している。つまり、

(A)	(B)	(C)	(D)
～ン	～ナイ	～ナイ	～ナイ
(1)	(2)	(3)	(4)

となっている。従って、～ンから～ナイへの転換は、「家族の年下の者」と「親しい友だち」との間で起こっている。次に（A）から（D）のアルファベットに替えて、発話相手に（1）から（4）の番号を付すと、（1）と（2）との間に転換点があることになる。このとき、話者の質問文1における転換点は（1）と表示する。

§3.2　話者のグループ分け

実際の分析に移ろう。分析の段階では、まず転換点の違いから話者を四つのグループに分け、次にこの四グループの間で相違を見せる社会的要素を探る。

グループ分けの際には、動詞否定接尾辞の転換点を最も重要な基準としたが、それとともに、動詞否定接尾辞と～デス・～マスとの出現順序も考慮に入れた。これは、第 3.3節の「年齢」に関する分析で述べるように、動詞否定接尾辞の転換と～デス・～マスの出現とが同時であるか否かが、動詞否定接尾辞に副次的機能が付与されているかどうかを判断する手掛かりになると考えたからである。

この四グループを〈表4〉から〈表7〉に掲げる。表中の「否定」の欄の数値が動詞否定接尾辞の転換点を表している。また、「敬語」の欄の数値は、その番号の発話相手まで～デスも～マスも使用されていないことを意味している。

〈表4〉第1グループ

	質問文1		質問文2	
話者	否定	敬語	否定	敬語
N4	0	3	0	3
N8	0	2	0	2
N22	0	3	0	4
N29	0	2	0	2
N59	0	2	0	2

(注) N数字は話者の整理番号

(1)　第1グループ（5人）

このグループは、質問文1と質問文2との両方において、動詞否定接尾辞～ナイのみを使用している話者から成る。〈表4〉中の「否定」の欄の「0」は、～ンが全く使用されていないことを意味している。

(2)　第2グループ（20人）

このグループは、質問文1と質問文2との両方において、あるいはいずれか一方において、～ンから～ナイへの転換が観察され、さらにこの転換が～デス・～マスの出現する前に起こっている話者から成る。つまり、〈表5〉において、動詞否定接尾辞の転換点の数値は、「敬語」の欄の数値よりも小さい値を示している。

(3)　第3グループ（22人）

このグループは、質問文1と質問文2との両方において、～ンから～ナイへの転換が～デス・～マスの出現と同時に起きている話者から成る。（但し、このグループには、～ン

から～ナイへの転換が～デス・～マスの出現よりも遅れている話者6人を含めた）この同時性は、〈表6〉中の「否定」の欄と「敬語」の欄の数値が一致していることから分かる。

(4) 第4グループ（10人）

このグループは、質問文1と質問文2との両方において、あるいはいずれか一方において、動詞否定接尾辞～ンのみを使用している話者から成る。〈表7〉中の数値「4」は、～ンのみを使用していることを表している。

〈表5〉第2グループ

質問文1		質問文2		話者の人数	質問文1		質問文2		話者の人数
否定	敬語	否定	敬語		否定	敬語	否定	敬語	
0	2	1	3	1人	1	2	2	2	3人
0	2	2	2	2人	*	1	2	3	1人
0	2	3	2	1人	*	2	1	2	1人
2	2	0	2	1人	2	2	1	3	3人
0	2	4	3	1人	2	2	1	2	2人
2	1	0	3	1人	1	3	3	3	1人
1	2	1	2	1人	1	3	3	2	1人

〈表6〉第3グループ

質問文1		質問文2		話者の人数	質問文1		質問文2		話者の人数
否定	敬語	否定	敬語		否定	敬語	否定	敬語	
2	2	2	2	7人	3	3	2	2	2人
*	2	2	2	1人	3	3	3	3	4人
3	2	2	2	1人	*	1	3	2	1人
2	2	3	2	2人	3	2	3	3	1人
2	2	3	3	1人	3	3	*	3	1人
					3	2	2	2	1人

（注）＊の箇所は、動詞否定接尾辞の使用数が少ないため、転換点を決定できなかった。

〈表7〉第4グループ

	質問文1		質問文2	
話者	否定	敬語	否定	敬語
N45	2	2	4	4
N16	2	2	4	2
N7	3	3	4	3
N38	3	4	4	4
N21	4	3	4	3
N17	4	4	4	4
N33	4	2	4	3
N35	4	3	4	4
N40	*	4	4	3
N50	4	4	4	4

§3.3 動詞否定接尾辞の使用状況の違いと社会的要因

ここでは、前述の四グループの間で相違が見られるアンケート項目を取り上げて分析する。

まず、性別に関して述べる。〈グラフ1〉は、各グループ内で女性の占める割合を百分率（パーセント）で表したものである。（注5）

〈グラフ1〉では、第3グループと第4グループにおいて女性の割合が低い点が注目される。第1グループと第2グループでは女性が80%を占めているが、第3グループでは50%、第4グループでは30%と次第に女性の割合が減少している。

第3.2節で提示した〈表4〉から〈表7〉のように、第1グループの転換点は0、第2グループの転換点は0、1、2が多く、第3グループの転換点は2あるいは3、そして第4グループの転換点は4が多くなっている。つまり、第1グループに近いほど～ナイの使用が多く、第

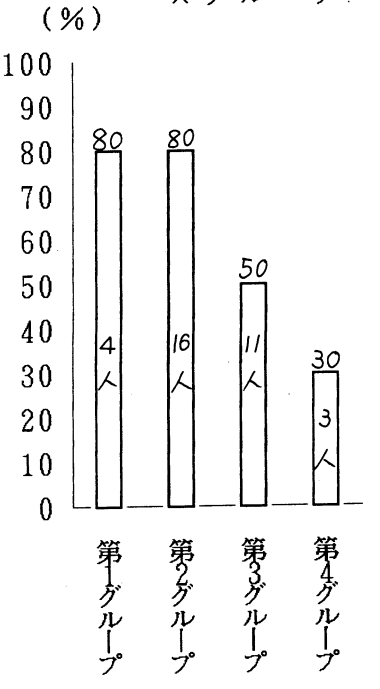
4グループに近いほど～ンの使用が多くなっている。一方、女性の割合は、第3グループと第4グループにおいて少なくなっている。従って、女性は男性よりも動詞否定接尾辞～ナイを多く使用していると言うことができる。

次に、年齢を取り上げる。〈グラフ2〉は、40歳代以上の話者の割合を各グループごとに算出したものである。〈グラフ2〉では、第3グループにおいて40歳代以上の話者の割合が少なく、逆に20歳代・30歳代の話者の割合が比較的多い点が注目される。(注6)

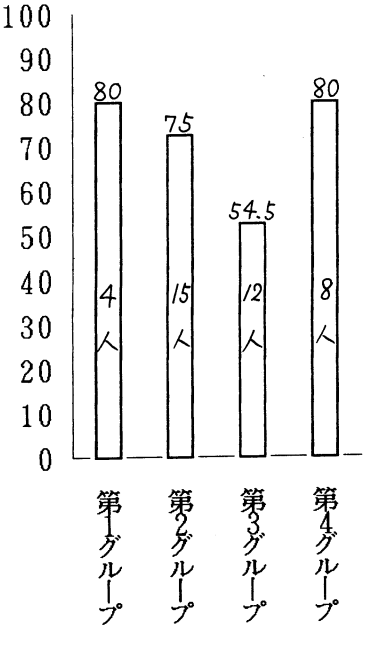
そこで、この第3グループに属する話者が言語面でどのような特徴を持っているかを考えてみよう。第3グループは、～ンから～ナイへの転換と～デス・～マスの出現とが同時に起きている話者から構成されている。動詞否定接尾辞の転換と敬意を表す接尾辞の出現とが同調している現象は、動詞否定接尾辞に付与されている副次的機能と～デス・～マスが持つ敬意表出の機能とが類似しているために起こっていると考えられる。従って、第3グループの話者は、第2節で述べた、動詞否定接尾辞の副次的機能を強く意識していると解釈できる。

これに対して、第1グループの話者は～ナイのみを使用し、第4グループの話者は～ンを使用することが多い。つまり、この二グループでは、動詞の否定形を形成する際に、～ナイと～ンとが対立することが少ない。このため、第1グループと第4グループとの話者は、動詞否定接尾辞に敬意に関わる副次的機能を付与していないと考えられる。また、第2グループでは、～ンから～ナイへの転換が～デス・～マスの出現よりも早く、第3グループのようには同調していない。従って、この第2グループにおいても、動詞否定接尾辞の副次的機能は第3グループほどには意識されていないと考えられる。

〈グラフ1〉性別×グループ



〈グラフ2〉年齢×グループ



以上のことから、40歳代以上の話者は、20歳代と30歳代の話者に比べ、動詞否定接尾辞に副次的機能を付与することが少ないと言うことができる。

最後に、宮島町という地域社会を志向するか否かと動詞否定接尾辞の使用状況との関係について述べる。

アンケート項目の一つと

して次の質問を行った。

（質問文３）

あなたは、できる事ならば、宮島町で一生暮らしたいと思いますか。それとも、思いませんか。

１（　）思う　　２（　）思わない

〈グラフ３〉は、この質問文に対して、「思う」と回答した話者の割合を、各グループごとに算出したものである。〈グラフ３〉において、第１グループは５人中２人（40%）ともっとも少なく、第２グループと第３グループとはほぼ同率の60%、第４グループは10人中９人（90%）と最も多くなっている。つまり、第４グループに向かうほど、宮島町という地域社会を志向する話者の割合が増加している。

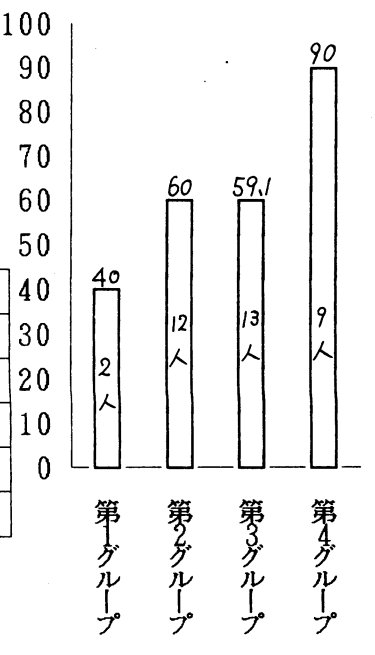
一方、動詞否定接尾辞の使用状況に関して言うと、第１グループから第４グループの方向に、～ナイの使用は増加し、～ンの使用は減少している。

従って、宮島町という地域社会を志向している話者は、志向していない話者よりも～ンを多く使用する傾向があると言える。

さらに、ここで、地域社会志向と性別との関係が問題となる。〈グラフ１〉で見たように、第１グループから第４グループにかけて、女性の割合は減少し、男性の割合は増加している。この男性の割合の分布は、〈グラフ３〉の地域社会志向が強い話者の分布と似ている。このため、男性は地域社会志向が強いのではないかという疑問が生まれる。

〈表８〉は、各グループ毎に質問文３に対して「思う」と回答した話者の人数を男女別に整理したものである。〈表８〉のように、男性15人、女性21人が「思う」と回答しており、男女の間には違いがない。つまり、男性が必ずしも地域社会を志向しているとは言えないのである。

〈グラフ３〉地域社会志向×グループ（%）



〈表８〉「思う」の回答者数

	男性	女性
第１グループ	1	1
第２グループ	2	10
第３グループ	6	7
第４グループ	6	3
計	15	21

§４．結果

以上の考察から明らかになった点をまとめると、次のようになる。

(1)　動詞否定接尾辞～ンと～ナイには、本来の言語的機能のほかに敬意の表出に関わる、新たな機能が付与されることがある。

(2)　女性は、男性よりも動詞否定接尾辞～ナイを多く使用する。

(3) 40歳代以上の話者は、20歳代と30歳代の話者に比べ、動詞否定接尾辞に副次的機能を付与することが少ない。

(4) 宮島町という地域社会を志向している話者は、～ンを多く使用する。

おわりに

小論では、一個の言語社会（宮島町）内に、同一の言語機能を有する二つの形態素が共存する場合に、話者がどのようにこの二つの形態素を使い分けているかを考察した。今回の分析では、話者は対立する二つの形態素に新たな意味付けをして使い分けていることと、この使い分けには話者の間で違いがみられることが分かった。特に、この後者の事実から、言語社会の非等質性の一端を垣間見ることができる。そして、このような言語社会の非等質性が言語変化を促進する原因となっているのであろう。宮島町という言語社会が今後どのように変化するか、興味が持たれる。

（注１）本稿は、昭和60年１月、広島大学に提出した修士論文の一部に、加筆訂正したものである。また、本稿と同内容の発表を第15回広島方言研究所ゼミナールで行い、愛宕八郎康隆先生、神部宏泰先生、今石元久先生（お名前は御発言の順）より御助言を戴いた。

（注２）宮島町は、広島県佐伯郡大野町の沖に浮かぶ厳島にあり、一島で一町を形成している。

（注３）本稿で言う動詞否定接尾辞とは、伝統的な国語学で使用する術語の「否定の助動詞」にあたる。

（注４）話者は、宮島町の選挙人名簿から無作為に抽出した。

（注５）百分率を用いると、話者の人数が少ないため、百分率の数値が実際の人数を大きく上回ってしまう。これは統計上好ましくないが、グループ間の相違を見るための便宜的な方法と考えていただきたい。

（注６）30歳代と40歳代との間に断層が認められる点は、遠藤邦基（昭和45年）において指摘されている。

参考文献

国立国語研究所（1981）『大都市の言語生活　分析編』　三省堂

Labov, W. (1972) Sociolinguistic Patterns. Philadelphia: Pennsylvania University Press.

杉山明子（1984）『現代人の統計　社会調査の基本』　朝倉書店

遠藤邦基（昭和45年）「年齢別にみる共通語化の現象 ――京都方言をめぐって ――」『国語学』80

〔付記〕調査に御協力くださいました宮島町の皆様に、心から感謝申し上げます。